

共同研究 ● アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究
—資源利用と物質文化の時空間比較 (2012-2015)

東南アジアの小規模漁民と海域ネットワーク社会

2014年7月6日に開催した第6回研究会では、特別講師として、フィリピンのビサヤ海域でフィールド調査を続ける瀬木志央（メルボルン大学）がセブ州・ボボール海峡の小規模漁民と商業漁業のネットワークの在り方について報告した。セブ州では1998年に制定された漁業法により、3トン未満の漁船による操業を小規模漁業、3トン以上の漁船による操業を商業漁業に分け、沖合15kmまでは小規模漁業による漁場に制限してきたにもかかわらず、実際には、3～10月に活発化するコブコブ漁と呼ばれる巻き網漁において、20トン以上の漁船を利用し、20～35名が操業する商業漁業が、15km圏内で操業することも増えているという。しかもこの漁の従事者はビサヤ海域内の他の島々から季節的に移動してきた人々が多く、このため在来の小規模漁業者との漁場をめぐる紛争も頻繁化しつつある。

しかし瀬木によれば、こうした移動漁民と地元民による紛争は通常エスカレートすることなく、むしろ日常的な様々なやりとりを通して、移動漁民や彼らの違法漁業は地元民により徐々に受容されている。その要因として瀬木は、地元民も漁獲分配を得られる点、移動漁民の到来による商店の売り上げ高の倍増、誰もが魚を販売する仲買人になれる新たな商業機会の出現、漁業協力による小規模漁民の漁獲確保などを指摘する。瀬木はこうした現象をウルフ（Wolf 1999）らによって論じられてきた構造的権力との関係性から捉え、コブコブの漁撈従事者と地元の漁民はいずれも社会的にはマージナルな貧困層であり、対立項とはなっておらず、むしろ共存関係にあることを指摘する。海域ネットワークの在り方を考える際、これらの指摘は、移動や資源利用を通して新たに形成されていく人々のネットワークの在り方を、権力や力といった社会・文化的側面からも検討することの重要性を強調するという点できわめて示唆的である。

沖縄の糸満漁民を生みだした力学

2014年10月19日に開催した第7回研究会では、メンバーの玉城毅（奈良県立大学）が、瀬木によって指摘された視点を



を発展させる形で、沖縄の糸満漁民による町形成のプロセスの背後に見られる政治経済と文化について明らかにした。とくに玉城が着目するのは、糸満社会における兄弟関係の紐帯と町の中心部にある門（ジョー）と呼ばれる地区との関連についてである。



コブコブ漁船による網漁の風景。(2006年5月、フィリピンセブ州、瀬木志央撮影)。

門とは移住村落であった糸満が発展する中で海への拡張的埋立によって形成された舟だまりの入江が、やがてその先端に護岸が築かれ、路地として陸地化した場所をさす。糸満にはこうした門が計8本あるが、玉城によればこの門の形成過程において核となったのが、兄弟の共住や集住に基づく、兄弟協力の上での漁業や経済的発展だった。さらに玉城はこうした兄弟に基づく協同の背景として、近世期に琉球で形成された父系嫡男相続による父系イデオロギーを指摘する。いっぽう、糸満が近代以降、急速に発展した背景として、沖縄本島における市場経済の拡大により那覇を中心とする町の形成が、糸満漁民の鮮魚の小売・行商というニッチを生み出した点も無視できない。糸満漁民はその後、分村形成を加速化して琉球諸島中に移住し、漁業活動を展開していくが、ここには近代の市場の拡大という政治経済的状況と父系イデオロギーという文化的資源（Wolf 1999）の結びつきが認められるという。瀬木によるビサヤの季節的な移動漁民と異なり、琉球の各地に移住村を形成した糸満漁民の社会やネットワーク形成を考える上で、近代的な市場の拡大や父系イデオロギーの存在があったとする玉城の指摘は興味深い。

メラネシアのムシロガイ交易と海域ネットワークの歴史の変遷

同じく第7回研究会では、特別講師としてメラネシアのパプアニューギニアやソロモン諸島で長年に渡りフィールド調査を続けている深田淳太郎（一橋大学）が、ムシロガイ交易の過去から現在における歴史の変遷から見えてくる海域ネットワークの事例について報告した。

ムシロガイの貝殻を利用した貝貨タブは、パプアニューギニアのニューブリテン島ラバウル近郊に住むトーライ人が伝統的に使ってきた貝殻貨幣である。現在でも婚資や賠償の支払い、葬儀や成人式などの儀礼での威信財といった慣習的な用途のほか、ちょっとしたものの売買などにおいて交換媒体として利用され続けている。さらに学校の授業料や税金の支

払いでも利用可能であり、その需要は旺盛だが、ムシロガイそのものはラバウル近郊ではとれず、昔から遠方より供給されてきた。

深田によれば、その供給地はムシロガイ資源の増減や交通網の有無といった諸要因により、変遷を重ねてきたという。たとえばヨーロッパ人との接触により文献記録の残る 19 世紀末には、ラバウルからアウトリガーカヌーで海岸沿いに 2-300km 離れたナカナイ地方からムシロガイを供給してもらう代わりに、ラバウル沖やニューアイルランドでとれる貝をナカナイへ送るといった交換に基づく交易ネットワークが形成されていた。その後、大恐慌や太平洋戦争を経て形は少しずつ変わりながらもナカナイからのムシロガイ供給は 1970 年代まで続く。いっぽうこの頃からブーゲンビル島での鉱山開発と同時に船や飛行機による交通網の整備が進み、各地のムシロガイがブーゲンビル経由でラバウルへ送られ、1980 年代には最盛期を迎えることとなる。しかし 1988 年、ブーゲンビルで内戦が勃発すると鉱山は閉鎖し、交通網も断絶され、このムシロガイルートも消滅へ向う。以後、ラバウルでは深田が長期滞在していた 2002-6 年に到るまでムシロガイは不定期にしか入手できない資源となっていた。

ところが 2010 年にその状況が一変し、ムシロガイはラバウルの市場でいつでも購入可能となる。これらはいずれも隣国となるソロモン諸島のロピアナラグーンで採取されたムシロガイで、ソロモンとラバウルを結ぶ新たなルートを開発した一人の仲買人 N による個人的な才覚によるところが大きいという。また彼によりムシロガイ交易は個人的な小遣い稼ぎからビジネスへと変化した。こうした 100 年以上におよぶムシロガイ交易の変遷からは、特定資源を巡るネットワークのあり方が政治や開発、そして交通網の発達と近代化に柔軟に対応してきた姿を見てとれる。またその過程で従来の交換経済に基づく特定社会との相互的ネットワークが、資源の供給地と消費地という交易ルートへと変貌し、その担い手も商売を目的とした仲買人へと集約されていく流れも指摘できよう。

人類の移住と海域ネットワーク社会

2014 年 11 月 16 日に開催した第 8 回研究会は、東南アジア考古学会の 2014 年度大会「東南アジア・オセアニア・琉球における人類の移住と海域ネットワーク社会」（共催：上智大学）を兼ねる形で、公開研究会として開催された。本研究メンバーの中でも考古学を専門とするメンバーを中心に各人の成果発表を行った。まず秋道智彌（総合地球環境学研究所）が基調講演を行い、民族誌的時間軸における海域ネットワークのあり方を検討する上での重要事項として、言語や資源交換、漁法などの

技術の伝播を指摘した。ついでオセアニアの先史時代における事例として印東道子（国立民族学博物館）がミクロネシアの離島域における資源を巡る海域ネットワークのあり方をファイスマ島の事例から、山口徹（慶応義塾大学）が環礁島における景観形成の背後に見られる海域ネットワークのあり方をマーシャル諸島の事例より論じた。いっぽう琉球における事例では、島袋綾野（石垣市教育委員会）が更新世以降における八重山列島の人類移住と海域ネットワークについて概説し、ついで山極海嗣（琉球大学）が八重山列島へ土器文化をともなった新たな移住が起こった下田原期からその後の無土器時代における石材や陸獣資源の動きについて報告した。続いて東南アジア島嶼部の事例として、筆者が新石器～金属器時代におけるウォーラシア海域の人類移住やモノの動きを、田中和彦（上智大学）がフィリピンとその周辺地域における人類移住や埋葬形態の類似性

について、いずれも最新の発掘成果を取り入れつつ紹介した。これに対し、大陸部の事例としては特別講師として深山絵美梨（早稲田大学）がベトナムや南シナ海沿岸域で出土する耳飾の分布から、また山形真理子（金沢大学）がベトナムの甕棺埋葬における考古学的証拠から鉄器時代の南シナ海における人類移住や海域ネットワークのあり方について論じた。

第 8 回研究会では各地域や時代における海域ネットワークの特徴が明らかになり、そこに見ら

れる共通性や違いに関する議論も活発に行われ、盛況のうちに終わった。しかし、こうした相違性が認められる先史時代の海域ネットワークをどう定義し、類型化していくか、さらには第 6、7 回研究会で詳細に論じられた近現代における海域ネットワークの形成過程やその背後に見られる諸要因が先史時代の事例にもどこまで認められるのかといった発展的議論まで進めることはできなかった。この課題については 2015 年度の研究会で改めて積極的に論じていく予定である。

【参考文献】

Wolf, Eric R. 1999 *Envisioning Power: Ideologies of Dominance and Crisis*. University of California Press.

おの りんたろう

東海大学海洋学部准教授。専門は東南アジア・オセアニアの海洋考古学・民族考古学。おもな著作に『海域世界の地域研究——海民と漁撈の民族考古学』（京都大学学術出版会 2011 年）、*Pelagic Fishing at 42,000 Years Before the Present and the Maritime Skills of Modern Humans*（共著、*Science* 334, 2011）、*Prehistoric Marine Resource Use in the Indo-Pacific Regions*（共編著 Australian National University E Press 2013）。